

子どもの自立に対する母親の意識と自尊感情との関連：大学生の子どもを持つ母親を対象に

長崎, 千夏
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/3581>

出版情報：九州大学心理学研究. 5, pp.163-170, 2004-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

子どもの自立に対する母親の意識と自尊心 との関連

—大学生の子どもを持つ母親を対象に—

長崎 千夏 九州大学大学院人間環境学府

The relation between the consciousness of mother to the child's independence and self-esteem —For the university student's mother—

Chinatsu Nagasaki (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this paper is to represent the influences and factors of the consciousness of the mother with the child of adolescence latter term (university student), which is the time of relationship changes between mother and child. The first study focused on 'the acceptance of independence of the child by the mother'. It proved the hypothesis of when the communication was highly felt by the mother and the child, 'the acceptance of independence of the child by the mother' is more promoted. The scale which measures the consciousness of mother to the child's independence was made. This measure consists of 2 factors of 'consciousness which treats a child as an adult' and 'reliance toward a child'. By the second study, it cleared that the mother with higher self-esteem had more reliance toward the child.

Keywords: the consciousness of mother, child's independence, self-esteem

1 問題と目的

子どもが自立を迎えるとき、母親はいかなる心理を抱くのであろうか。母親は子どもを産んでから死を迎えるまで、子どもとの関係を絶つことはできない。その過程は、子どもの成長、自立を見守る過程ともいえるだろう。

青年期後期の子どもを持つ母親の多くは、中年期にあたると考えられる。近年、中年期の発達課題として Erikson が「generativity (世代性)」を挙げたのをはじめ、Havighurst などが様々な発達課題を挙げている。また、岡本 (1985) は中年期に起こる「アイデンティティ再体制化」のプロセスを明らかにしている。こうした中年期の心理社会的成長に関する研究が行われる一方、この時期には更年期障害や空の巣症候群、抑うつ神経症など様々な精神障害が好発するとも言われている。中年期は、心理的成長への転機であると同時に、心理社会的危機の時期でもあるといえるだろう。そして、これらの研究ではいずれも子どもとの関係の重要性がうたわれてはいるが、母親視点の母子関係に関する実証的研究はほとんど見当たらないのが現状である。

青年期の子どもとその母親に関する心理学的研究は、長らく青年期研究の中で発展し、青年の視点からの研究がそのほとんどを占めていた (落合・佐藤 1996, 平石 2000他)。ファミリーライフサイクル理論では, Berman, E.M. & Life, H.I. や Carter, E.A. & McGoldrick, M. らが家

族全体としての発達に着目しその発達課題を扱っている。こうした研究の流れをみて、柏木 (1995) は従来の親子関係に関する心理学的研究の問題と限界のひとつとして「ほとんど発達心理学の中で親自身が問題とされることなく、もっぱら子どもの発達との関係でのみ取り扱われ、子どもの発達に影響を与えるものとして研究されてきたこと」を挙げている。さらに、「最近、(中略) 親から子、子から親への両方向の働きかけがようやく問題とされるようになってきた。しかし、これらと最終的には、そうした相互作用や関係が子どもの発達にどう関わるかというところに戻り、関心は依然子どもの発達に留まっている」と指摘している。こうした中、柏木・若松 (1994) らは、乳幼児期の子どもを持つ母親自身の心理的成長について検討している。また、子離れの心理について述べた文献は多いが (小此木 2003, 国分 1982, 森下 1997他), 心理学領域における実証的研究は散見するにとどまる。

そのような中、友清 (1994) は、大学生の母親を対象に質問紙調査を行い、「母親による子どもの独立の受容尺度」を作成し母親自身の様々な役割投入度との関連を調べている。その結果、子どもの独立を受容できている母親ほど個人役割への投入度が高く、さらに精神的健康度が高いことを明らかにした。このことから、母親が個人としての自分にエネルギーを注くことが、子どもに対する意識に影響を与えていると考えられる。ただし、この

研究における「母親による子どもの独立の受容」尺度では、母親と子どもの意見が衝突する場面において、母親がどの程度子どもの意見を尊重し自らの干渉を控えるかといった行動面を尋ねており、母親自身が子どもに対してどのような意識を抱いているのかは検討されていない。また、役割投入度に関して量的分析に留まっている。

心理学領域一般において、親子関係におけるコミュニケーションの重要性が指摘されている。子どもの大人びた言葉を聞いて、子どもの成長を実感する母親もいれば、反抗するわが子にまだ心配のぬぐいきれない母親もいるだろう。母親の抱く子どもに対する認知は、子どもからのコミュニケーションのとり方に影響を受けると考えられる。

本研究では、母親と子どもとの関係が大きな転換を迎え、対等なものとなるとされる青年期後期（大学生）の子どもを持つ母親の、子どもに対する意識を明らかにし、その意識に影響を及ぼしている要因を解明することを目的としている。まず第一研究において「子どもの自立に対する母親の意識」の一端を捉えていると考えられる「母親による子どもの独立の受容（友清 1994）」に着目し、「母子間コミュニケーションを母子ともに高いと感じていれば、母親による子どもの独立の受容はより促進されている」という仮説の検証を行う。あわせて、母親の内的な意識面を探るために、文章完成法（以下 SCT）により「子どもの自立に対する母親の意識」の項目抽出を行い、尺度作成を試みる。そして、母親が個人としての自分にエネルギーを注ぎ、日々の生活に満足感を見出すことが子どもへの意識に影響を与えているという先行研究からの示唆により、第二研究では、作成した尺度と母親自身の自尊感情との関連を探索的に検討することを目的とする。

II 第一研究

1. 目的

「母子間コミュニケーションを母子ともに高いと感じていれば、母親による子どもの独立の受容はより促進されている」という仮説の検証および、「子どもの自立に対する母親の意識尺度」の作成。

2. 方法

—1. 調査対象

調査対象は、A県下の国立大学生1-4年生の男女とその母親104組（回収率68.0%）である。子どもの性別による内訳は、男子学生の母親45名、女子学生の母親59名。

—2. 調査内容

①母子間コミュニケーション尺度：母子間で交わされる

と考えられる様々な会話がどの程度実際になされていると認知しているかを尋ねるもの。子どもから母親に対するコミュニケーションの内容により筆者が独自に項目を収集し、因子分析を行った。この結果、「2.出かけた先での楽しかったことについて母親に話す」といった第1因子『楽しい会話』9項目、「17.友人関係での困ったことや先生とのトラブルについて母親に話す」といった第2因子『悩みの開示』5項目、「25.私は、母親が家事などを行っている（していた）ことへの感謝を表現することがある」「5.母親が家族や仕事のことで落ち込んでいるとき、私はいたわりの言葉をかける」といった第3因子『対等な会話』4項目、「3.母親に“こういうことは干渉してほしくない”ということを使う」といった第4因子『反抗』5項目を抽出した。この計4因子、23項目（クロンバックの α 係数は各因子において.65~.89）を「母子間コミュニケーション尺度」とし、母親、子どもの双方に4件法で実施した。なお、母親用の尺度では、項目内容は同じもので「子どもは私に話をしてくれるか」と主語を変えて使用した。尚、この尺度は、得点が高いほど子どもから母親へのコミュニケーション行動が多いと認知されていることを表す。

②子どもの独立の受容尺度：友清（1994）の尺度を使用した。全7項目。親子間で子どもの自立をめぐる意見の対立などが起こりうると考えられるエピソードを用意し、そのような場合に親の意見に従わせるかを、「その通りである」から「違う」の4件法で尋ね、4-1の得点を与えた。具体的な質問項目例は以下の通りである。

- iii 子どもの買った洋服が好意の持てないものだった場合そのような服装はしないように言い聞かせる。
- iv 男女交際について子どもと意見が異なった場合親の意見に従わせる。
- vii 子どもの結婚については、親の考えに従わせたいと思う。

③ SCT：高橋（1998）および精研式 SCTを参考に、筆者が刺激語を作成し本調査用 SCTとした。子どもの自立についてどのように考えているかをみるもの3つ（「子どもに干渉しないようにしていることは……」「子どもが失敗したら……」「子どもの人生は……」）、母親としての自分・妻としての自分・個人としての自分をどのようにとらえているかをみるもの4つ（「母親としての私は……」「私にとって仕事や趣味は……」「妻としての私は……」「私が将来、楽しみなのは……」）、合計7つの項目から成る。

なお、質問紙の中の「子ども」は全て大学生の子どもとの現在の状況を想起して回答してもらうよう教示した。

3. 結果と考察

—1. 仮説の検証

「母子間コミュニケーションを母子ともに高いと感じていれば、母親による子どもの独立の受容はより促進されている」という仮説の検証のために、独立変数である「母子間コミュニケーション尺度」の得点が高い親子と低い親子とを抽出した。まず母親と子どもの両方についてコミュニケーション各因子得点が平均値+標準偏差の値より高い者をh群、平均値-標準偏差の値より低い者をl群として各々抽出した。次に、母親も子どももh群である組をH群、母親も子どももl群である組をL群として因子ごとに群を抽出し、これを最終的な群分けとした。

従属変数の「子どもの自立の受容尺度」は質問項目が7項目あり、それぞれの項目には異なるエピソードが描かれ、独自性の高い具体的な場面設定がなされている。そのためそれらをまとめて母親による子どもの自立の受容とするのではなく、各エピソードの独自性を重視して項目ごとの得点を従属変数として扱い分析を進めていく。

コミュニケーション尺度第一因子得点において自立の受容得点の平均値に有意差は現れなかった。第二因子ではL群よりもH群の自立の受容項目4の得点が有意に高かった ($t(16) = -3.39, p < .01$)。第三因子では自立の受容項目7においてL群よりもH群のほうが有意に高かった ($t(27) = -4.37, p < .01$)。第四因子ではH群よりもL群の自立の受容項目3の得点が有意に高かった ($t(7) = -3.04, p < .01$)。

この結果から、「将来についての、また友人関係での悩みや不安を多く話してくれる」子どもの母親は、自分の子どもは悩み考えることができると感じており、もし悩んだときには話してくれるだろうという安心感から、「男女交際について、たとえ子どもが自分と異なる意見を持っていても、それを受入れて母親自身の考えを押しつけることが少なくなる」ことが示唆された。「独立した対等な個人としての我が子の言葉を聞き、その成長を実感できる母親」は、「子どもの結婚という人生の岐路において自分の意見に従わせることをやめ、子ども自身に決定をゆだねることができる」ようである。また、「母親が干渉することに反抗する子どもの母親」ほど、「子どもの服装に口出しをして親の意見に従わせて」いる。服装という日常的なことに干渉している母親を持つ子どもが、反抗することで自立のメッセージを送っている様子がかがえる。「楽しい会話」さえあれば母親と子どもの関係は良好で、母親は我が子を大人として扱うようになれるというわけではない。母親の側は反抗する我が子の中の自立のサインを受け止め、子どもの側は悩みを開示して自らの弱い部分も素直に表現でき、また母親に対する感謝やいたわりを伝えて自分の意見を率直に語ってこそ、母親は子どもの成長を信じて干渉の手をゆるめることができることが明らかになった。

2. SCTの検討

「子どもの自立の受容尺度」総得点の平均値+標準偏差より得点の高い母親をH群(13名)、平均値-標準偏差より得点の低い母親をL群(12名)として抽出し、各項目についてSCTの記述をカテゴリーに分類した。ひとりの記述が複数のカテゴリーを含む場合は全てをカウントした。なお、度数が小さいため、統計的分析を行うのではなく、各群の特徴を概観することとする。ここでは特に、「子どもの自立の受容」高群と低群に違いの見られた項目を取り上げる。

・項目1「子どもに干渉しないようにしていることは……」

H群とL群で度数に違いがみられるカテゴリーは、「すべて」「友人関係」「気になる」「特になし」の4カテゴリーであった。まずH群には少なく、L群に多くみられたカテゴリーは「気になる」と「友人関係」の2つで、特に「気になる」はH群にはみられなかった点が特徴的である。自立の受容得点の低い母親は、干渉しないようにしていることは『なかなか難し』く、『すべてにおいて気になる』ことを自覚しており、あるいは「友人関係」という具体的な内容を挙げて干渉しないことの幅を限定して挙げてしまう傾向が見受けられる。

次にL群よりH群に多くみられた記述は「すべて」と「特になし」で、干渉しないようにしていることを具体的に挙げるといよりは『生活全般』といったように子どもの生活にあまり口を出さないようにしている姿勢がかがえる。なかには『とにかく自立するために口出しは最小限にしたい』という記述もみられ、意識的に子どもの自立を促そうとしている母親もいる。また、『特になし』『特に考えたことはない』というように子どもへの干渉自体をあまり意識していない記述がみられることも興味深い。母親として何ができるのかという思いに縛られず、楽に構えることで我が子の成長を受け入れることがスムーズに行われうるのかもしれない。

・項目2「子どもが失敗したら……」

すべてのカテゴリーにほぼ同数の分布がみられ、子どもが失敗したときの母親の行動が現れた。『黙って見守る』母親がいる一方で『同じ失敗をしないようにと言』ってアドバイスを与えて行動を起こす母親もいる。また同じ行動でも、『おいしいものを作って食べさせ』、『またいい事もあると励ま』し、なぐさめる母親もいる。母親にとって子どもの失敗は『胸が痛む』ことであり、何とかして乗り越えてほしいという気持ちが現れている。

ただし『自分で処理させたい』といった「任せる」にはL群の度数が0であり、『必ず立ち直れるだろう』という子どもへの信頼を基盤として意識的に子どもに責任を持たせ、自分の力で立ち直らせようという記述はH群にしかみられなかった。あぶなっかしく見える子どもに

手が出そうになるのをぐっとこらえ、子どもに任せてみようというこころのゆとりが求められるようである。

・項目4「母親としての私は……」

母親としての自分に関する記述に最も多かったものは、『子どもを自立できた人間にする役目を担っていると思う(H群)』『気になることがあれば助言しつつ見守る(L群)』といったものに代表される、「育てる」である(合計8名)。母親として子どもによくしてあげたいという気持ちが見て取れる。次に「満足」と「マイナス評価」がそれぞれ合計5名と同数であり、『とても幸福です』『子どもに感謝しています』といった母親としての幸せを率直に表現している女性がいる一方で、それと同数の女性は『失格だと思う、すまないと思う』『子どもにとっては口うるさい存在かもしれないと思う』というように自分の悪い面に目が向いてしまっている。

さらにこの「マイナス評価」の5名のうち4名はL群であり、自分をネガティブに認識している記述は子どもの自立を受容できずに干渉する母親に多くみられる。子

どもがおとなになることを受け入れるのに困難を抱えている女性というのは、母親としての自分に固執しているというよりは、母親としての自分を低く評価し自分を責めるという傾向を示していた。あるいは自分を責める気持ち、子どもにすまないという気持ちから子どもにかまひ、手を出してしまうとも考えられる。

『残された人生を自分なりに生きてみたい』といった「自分の人生」はH群に2名、L群にはみられなかった。母親としての自分、と限定して尋ねられても、自分自身の人生を楽しんでいることを記述するということは、母親である自分に固執せずひとりの人間として自身をとらえていることが背景にあるとも考えられる。

・項目6「妻としての私は……」

妻としての自分への「プラス評価」と「マイナス評価」という対照的な記述が現れたことは特徴的であろう。さらに、『幸せだと思う』などの「プラス評価」にH群の半数以上の女性が該当しており、子どもに構いすぎない母親の多くは妻としての満足感や幸福感を感じており、

Table 1
「子どもの自立に対する母親の意識」尺度項目におけるエカマックス回転後の因子負荷量

項 目	第一因子	第二因子	共通性
3. 子どものすることには手を出さないように意識している	.746	.370	.56
5. 意識して子どものことを子どもに任せようと考えている	.611	.052	.44
7. 子どもに干渉しないように意識している	.750	.351	.56
8. 子どもを大人として扱っている	.704	.532	.55
10. 意識して子どもへの口出しを控えるようにしている	.792	.276	.64
12. 子どもは自立していると思う	.658	.543	.51
13. 子どものことは見守るように努めている	.793	.364	.63
17. 自分の価値観を子どもに押しつけないように意識している	.466	-.036	.30
19. 子どもは一人前になったと思う	.551	.414	.34
20. 子どものことは子ども自身で決めさせるように意識している	.650	.374	.43
6. 子どもが子ども自身のことに責任を取れるか心配である*	-.016	.567	.42
9. 子どものことを安心して見ていられる	.461	.681	.49
11. 子どもはまだまだ「子供」だと思う*	-.045	.488	.33
15. 子どものことは子ども自身に処理させようと思っている	.600	.680	.57
16. 子どもへの干渉を控えるのは難しい*	.268	.502	.25
18. 子どもの行動は心配である*	.292	.707	.50
21. 子どもに何かあっても、自分の力で立ち直ると思う	.492	.525	.36
22. 子どもを頼もしく思う	.465	.690	.51
固有値	5.04	3.33	
寄与率 (%)	27.99	18.51	
累積寄与率 (%)	27.99	46.50	
Cronbach の α 信頼性係数 (尺度全体では.86)	.86	.75	

注 * は逆転項目を示している。

それを素直に表現することができている。子どもが巣立ったあとにまた二人に戻る夫との関係に満足していれば、子どもとの関係に執着する必要がなくなると考えることができる。反対に「マイナス評価」はH群では1名だがL群には3名該当者がおり、『あまりよくないと思う』『申し訳ないと思っています』といった記述がみられた。

一 3. 「子どもの自立に対する母親の意識尺度」の作成

SCTの回答をもとに22項目が作成された。「子どもが失敗したら」「子どもに干渉しないようにしていることは」という刺激文に対する回答および筆者の作成した項目を臨床心理学系の大学院生3名に選定、修正してもらい、22項目を暫定項目とした。評定に関しては、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらかというにあてはまらない」「ややあてはまらない」「全くあてはまらない」の5件法で尋ねた。具体的な教示は以下の通りである。「あなたが大学生のお子様に対して感じていらっしゃるについてお尋ねします。以下の事柄について、どの程度あてはまりますか。あなたにとって最もぴったりだと思う数字に丸をつけてください。なお、文章中の『子ども』は大学生のお子様を指しています」

各項目について平均値と標準偏差を求め、天井効果およびフロア効果のみられた4項目を削除し、残りの18項目について因子分析を行った。共通性の初期値を1とした主成分分析を行い、後続因子との固有値の差に基づいて2因子解を適当と判断し採用した。このとき2因子による累積説明率は46.50%であった。エカマックス回転後の各項目の因子負荷量をTable 1に示す。

Table 1において因子負荷量の絶対値が.40以上を示した項目の内容を参考に各因子を解釈した。第1因子は、「5.意識して子どものことを子どもに任せようと考えている」、「8.子どもを大人として扱っている」などにみられるように、わが子を「大人」扱いし、意識的に干渉を控えようと努力している内容であることから、『わが子を大人扱いする意識』と命名した。次に第2因子は、「21.子どもに何かあっても、自分の力で立ち直ると思う」、「22.子どもを頼もしく思う」など、子どもが自分自身の力でやっていくことができるだろうという思いが表れている。逆転項目についても「6.子どもが子ども自身のことには責任を取れるか心配である」など、子どもを完全には信頼できない内容であることから、第2因子を『子どもへの信頼感』と命名した。

なお、信頼性の指標となるクロンバックの α 係数は、尺度全体の18項目で.86であった。また、第一因子については.86、第二因子については.75であり、尺度全体および各因子における十分な整合性が確認された。

III 第二研究

1. 目的

予備調査により作成された「子どもの自立に対する母親の意識尺度」と母親自身の「自尊感情」との関連の検討。

2. 方法

一 1. 調査対象

調査対象は、A県下の国立大学生の子どもを持つ母親75名である。子どもの性別による内訳は、男子学生の母親28名、女子学生の母親47名。母親の平均年齢は47.93歳（標準偏差3.47）、子どもの平均年齢は19.07歳（標準偏差0.95）。

一 2. 調査内容

① 「子どもの自立に対する嬉しさ・さみしさ」尺度

「嬉しさ」について1項目、「さみしさ」について1項目、計2項目からなる。「子どもの自立に対する嬉しさ」尺度は、「お子様のことについて、お尋ねします。以下の例にならって、あなたにとって最もあてはまる数字に丸をつけてください。なお、文章中の『子ども』は大学生のお子様を指しています。」「子どもがおとなになることは…」の教示文のもと、「非常に嬉しい（3点）」と「全く嬉しくない（-3点）」を両極とし、中央に「どちらともいえない（0点）」をはさんだ7件法で尋ねた。同様に「非常にさみしい（3点）」「全くさみしくない（-3点）」を両極としたものを「子どもの自立に対するさみしさ」尺度とした。

② 「子どもの自立に対する母親の意識尺度」（第一研究にて作成）第1因子「わが子を大人扱いする意識」10項目、第2因子「子どもへの信頼感」8項目の計18項目。

③ 「自尊感情」尺度

Rosenberg (1965) を山本・松井・山成 (1982) が邦訳したものを利用した。得点が高いほど自己全体を肯定的にとらえ、自己を高く評価していると解釈される。回答様式は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の5件法であった。

3. 結果と考察

一 1. 基本統計量

「子どもの自立に対する嬉しさ・さみしさ」尺度は「非常に嬉しい（さみしい）」を3点、「まったく嬉しくない（さみしくない）」を-3点とし、「どちらともいえない」を0点として、1点きざみで得点を与えた。度数分布をFig.1, 2に示す。また、「子どもの自立に対する意識」尺度における基本統計量を示す（Table 2）。さらに、各尺度間の相関についてTable 3に示す。

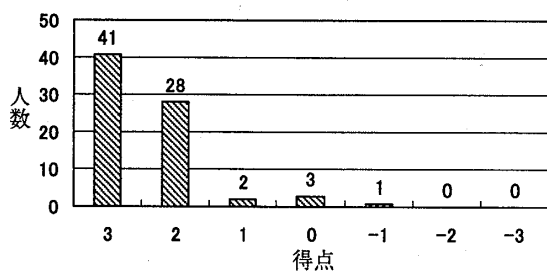


Fig.1 「青年の自立に対する母親の嬉しさ」尺度度数分布

3点は「非常に嬉しい」
0点は「どちらともいえない」
-3点は「全く嬉しくない」

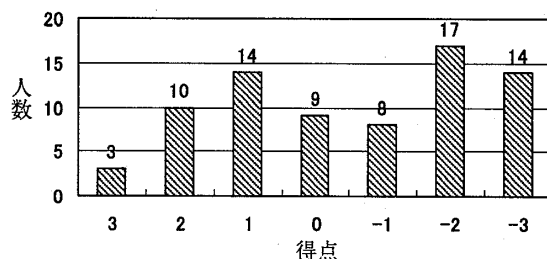


Fig.2 「青年の自立に対する母親のさみしさ」尺度度数分布

3点は「非常に嬉しい」
0点は「どちらともいえない」
-3点は「全く嬉しくない」

Table 2
「子どもの自立に対する母親の意識」尺度基本統計量

		総得点	第1因子	第2因子
全 体	平均値	98.56	44.89	32.28
	標準偏差	12.42	7.02	5.72
	最大値	122	56	46
	最小値	56	16	18
男 性	平均値	99.71	42.07	34.29
	標準偏差	8.46	4.22	4.62
女 性	平均値	97.87	40.62	33.81
	標準偏差	14.31	5.98	6.32

Table 3
各尺度間の相関

	子どもの自立に対する		子どもの自立に対する意識尺度			自尊感情	
	うれしさ	さみしさ	総得点	第1因子	第2因子		
子どもの自立に対する	うれしさ	1.00	-.22	.18	.22	.06	-.06
	さみしさ	-.22	1.00	-.09	-.09	-.04	-.09
子どもの自立に対する意識尺度	総得点	.18	-.09	1.00	.87	.82	.23
	第1因子	.22	-.09	.87	1.00	.45	.13
	第2因子	.06	-.04	.82	.45	1.00	.26
	自尊感情	-.06	-.09	.23	.13	.26	1.00

Fig.1をみると、ほとんどの母親が子どもの自立を嬉しいと感じていることがわかる。一方で、子どもの自立に対するさみしさの度合い (Fig.2) はばらつきが大きく、非常にさみしく感じている母親から全くさみしく思っていない母親までいることがわかる。子どもの自立をよるこぶ気持ちは、多くの母親に共通する思いでありなが

ら、中には同時にさみしさも感じるというアンビバレントな感情を抱いている母親が存在するのである。

一2. 「子どもの自立に対する母親の意識尺度」と「自尊感情尺度」の関連

母親の「自尊感情」が「子どもの自立に対する母親の意識」にどのように影響しているかを明らかにするため

に、「自尊感情」尺度の平均値を基準に自尊感情高群・低群にわけ、「子どもに対する母親の意識尺度」総得点の差をt検定により検討した結果、有意な差がみられた ($t(73)=2.30$ $p<.05$)。さらに因子ごとに検討するため、各因子の平均値についてt検定を行った。その結果、第1因子については有意差がみられず、第2因子については自尊感情低群よりも高群の方が有意に高かった ($t(73)=2.39$ $p<.05$)。

この結果より、自尊感情の高い母親ほど、子どもへの信頼感が高いことが明らかとなった。自尊感情とは、自分自身を全体として肯定的にとらえる感情のことである。「自分自身」の中には、自分がこれまで行ってきた育児も含まれるのかもしれない。価値のある、役に立ちうる人間である自分が育てた子どもであるから、何かあっても大丈夫、あの子ならやっつけられるだろうという思いが生まれるのも、当然かもしれない。小此木(2003)は、子どもを心配し手放せぬ母親の心理には、「なんらかの罪悪感や分離不安」が潜んでいる場合も多いと述べている。また、高橋(2003)は、思春期の子離れについて、母親自身の思春期の悩みや戸惑いを自分自身が受け入れているか、そしてそれを子どもに呈示できるかどうか親の姿勢として重要であると述べている。つまり、ひとくちに自尊感情といっても、それは現在のみならず母親の過去、特に母親自身の自立のありようや、罪悪感や分離不安といったこころの深い問題とも関係してくる、複雑な母親の心理を想定する必要があるだろう。

IV 総合考察

本研究は、これまで実証的研究がほとんどなされていなかった「青年期の子どもを持つ母親」に関する心理学的研究である。質問紙調査によって得られた今回の主な結果は、①「子どもから母親へのコミュニケーション行動を多いと認知している母親ほど、そうでない母親に比べて子どもの独立を受容できている」、②「自尊感情の高い母親ほど、そうでない母親に比べて子どもへの信頼感が高い」の2点である。自立を遂げようとする子どもに対する母親の意識を、「子どもの独立の受容」「わが子を大人扱いする意識」「子どもへの信頼感」という側面からとらえ、これに影響をおよぼす要因として、「子どもから母親へのコミュニケーション行動」と「母親自身の自尊感情」を取り上げた。わが子が何も語らずにただ黙々と成長するのではなく、母親に対して悩みを開示したり、母親をいたわるような言動を行うことで、母親は子どもの成長を実感し、干渉を控えて安心して見守ることが可能になる。また、「この子なら何かあってもうまくやっつけていこう」といった子どもへの信頼感が母親の中に生まれるのに、母親自身の自尊感情、母親として、

妻としての自分に対する自尊心が関連していることは興味深い。従来、子離れの文脈の中では、母親としての自分だけでなく妻として、個人としての自分を持つことで子離れが達成されるとの文献が数多くみられてきたが、今回、単に母親役割に執着しているか否かではなく、母親・妻としての罪悪感や自尊感情との関連が見出されたのである。

本研究の限界として、子どもの自立に対する母親の意識を包括的に扱えていない点があげられる。母親の視点に立った心理学的研究として、面接調査などの導入により、子どもの自立に対する母親の思いをより多角的・包括的に検討することを今後の課題としてあげたい。

【付記】

本論文は、日本青年心理学会第8回大会および日本家族心理学会第19回大会において発表した「母親による子どもの自立の受容—青年期の子どもとのコミュニケーションをめぐる—」および「青年の自立に対する母親の意識とかかわり—質問紙法およびConsensus Rorschach法による接近—」の一部を加筆修正したものである。座長の労をおとりいただきました日本女子大学渡邊恵子先生、横浜国立大学高木秀明先生ならびに相愛大学相谷登先生、岐阜聖徳学園大学今川峰子先生、また貴重な意見をくださいましたフロアの皆様に深謝申し上げます。また、本論文作成にあたりご指導いただきました九州大学人間環境学研究院北山修教授ならびに同高橋靖恵助教授に感謝申し上げます。そして、調査にご協力いただきました大学生のお子様をお持ちになるお母様方に、こころより感謝いたします。

文 献

- 平石賢二 2000 青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識、アイデンティティとの関連 家族心理学研究, 14(1), 41-59.
- 小此木啓吾 2003 子離れの心理 真仁田昭他編 児童心理 金子書房 Pp.589-598.
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親になること」による発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 柏木恵子 1995 親子・家族・自立 柏木恵子・高橋恵子編 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 Pp.17-51.
- 国分康孝 1982 <自立>の心理学 講談社
- 森下正康 1997 青年と家族 鈴木康平・松田惺 現代青年心理学(新版) 有斐閣 Pp.117-134.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44(1),

- 11-22.
- 岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, **33**(4), 295-306.
- 高橋靖恵 1998 女子青年の家族コミュニケーションに関する基礎的研究 愛知淑徳短期大学研究紀要, **37**, 177-190.
- 高橋靖恵 2003 親と子それぞれの自己実現に向けて 真仁田昭他編 児童心理 金子書房 Pp.650-653.
- 友清由希子 1994 母親による子どもの独立の受容に関する一考察 九州大学卒業論文
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.